日本医史学雑誌　第64巻第4号（2018）　385–386

# 2.　日本医史学会の90年

酒井　シヅ

日本医史学会前理事長／順天堂大学特任教授

日本医史学会が学会として発足したのは昭和2年11月のことであった．初代理事長に呉秀三（東大精神科教授）が就任し，医史に関する事項を研究し，又医史に関する知識の普及を図ることを目的とした．

日本医史学会のそもそもの始まりは，富士川游の父雪（ススグ）によって始まった奨進医会である．雪は安芸国沼田郡長楽寺村（現在の広島市安佐南区長楽寺）で医を業としながら，近隣の同業の友を集め，医学知識の向上をはかるべく医学雑誌の回覧，医事ニュースの交換などを行う場を作った．この会を富士川游が引き継ぎ，全国的な会に発展させたのであった．明治25年3月4日に東京で初めて先哲祭を催した．3月4日というのは，明和8（1771）年に前野良沢，杉田玄白らが小塚原で腑分けを見学した日である．その時を第1回に数え，それから毎年3月4日に医家先哲追薦会が行われた．日本医史学会が誕生した翌年の総会は第37回医家先哲追薦会の時に開かれ，それは奨進医会と日本医史学会共催という形がとられた．以後，この先哲追薦会は実質的に日本医史学会の主催するところとなり，それを総会とした．

学会の機関誌は，明治13年創刊の中外医事新報をあてることに決めて，昭和16年の1287号より「日本医史学雑誌」と改題し，途中，休刊の時期もあったが現在に続いている．中外医事新報はその名が示すように，当初は，国内，国外の医事関係の記事を速かに報ずることを目的として，国外については特にドイツの最新医学雑誌にでている一般医家の興味をそそる記事を抄録して載せていた．明治21年の中外医事新報187号から中外医伝の項を設け，外国，国内の名医の略伝を載せている．また明治25年1月の第283号から明治31年1月の第427号までの間，ほとんど毎号に医人伝を掲載している．そして昭和元年末から医史学の専門誌に変った．この時流のなかで，冒頭に述べたように昭和2年11月に日本医史学会創立協議会が生まれ，翌月に日本医史学会が誕生したのである．

第2代理事長入澤達吉，3代理事長富士川游の跡をついで慶応大学の放射線科の教授藤浪剛一が第4代理事長になったが，わずか1年余り後に亡くなり，その後を山崎佐が継ぎ第5代理事長となった．この頃，すでに戦局が激化し，国威高揚の面からも日本の医学史が省みられ，医学史の研究が盛んに行われるようになってきた．また，昭和15年，紀元2600年を記念して明治前日本科学史の編纂が日本学士院で企画され，医学の分野ではその後も活躍した緒方富雄，小川鼎三，大鳥蘭三郎，中泉行正，田中助一，内山孝一，石原明，藤井尚久，山崎佐らが執筆を担当した．医史学会でも山崎佐理事長を中心に活発な活動がくり拡げられていた．しかも，山崎は学会を強化するために理事，評議員に現職の大学教授を据え，新しい企画を立て，次々と活動を展開するつもりでいたのであろう．しかし，不幸にして，戦局はますます激化して，ついに戦火をあびるまでになってしまった．時は昭和20年の1月，折角まとめ上げた1月号の原稿が印刷屋とともに焼失してしまった．無念にもここで日本医史学雑誌の長い休刊の時代に入っていった．とはいうものの昭和22年，大阪で開かれた第12回日本医学会総会で第1分科会の面目を果している．この時，大鳥理事を幹事にわずか10題であったが，演題が集まり，報告された．その内容は終戦直後の，激変の時代で

あったにもかかわらず，泰然自若としたものであった．癩病の歴史を論じ，ポンペの業績を讃え，織田信長の体質について述べるといった具合で，これがあの食糧難の時代かと驚かされる．昭和23年に，戦後第1回目の医家先哲追薦会が東京で開催された．だが，世相はますます激しい勢いで変化する中で，医家先哲追薦会もこれを最後に途絶えてしまった．その後，復活したのは昭和29年に日大の生理学の教授内山孝一第6代理事長のもと，日本医史学会総会が開催された．その回数は医家先哲追薦会のものを継承することにした．そして昭和29年には待望の日本医史学雑誌の復刊となる．それまで中外医事新報の創刊時からの通巻号数だけであったが，日本医史学雑誌と改題した時を第1巻と数えた巻数をつけ加えて，復刊第1号を第5巻第1号とした．また，それまで月刊誌であったものを季刊に変更した．ここに，復刊第1号の編集後記より当時の様子をご紹介する．「……何しろ経済的に無一物で，ここ十年も会費は一銭も徴収しなかったから会誌の印刷など思いもよらなかった．金を集めてからとも考えたが，1冊も会誌が出ないのに百倍以上値上げした会費を払い込む会員などまずなかろうし，こちらも徴収しかねる．しかし，思い切って東京在住の例会のレギュラーメンバーにお話して快く改正会費年額8百円也をいただき，ともかくも印刷にまでこぎつけた．（石原）」

現在の日本医史学会は，医師から歴史の専門家から幅広い分野の人からなり，発表される論文も古代から現代まで洋の東西に関係なく，バラエティに富んでいる．このように医史に関わりのあるものすべてに発表の場を設けることがこの学会の一つの目的であり，それらの発表の積み重ねがあってこそ，現代の医学の本質をより正確に理解することが可能となって，自ら将来の方向も予測できるであろう．医療，医学の歴史は日本の文化史を明確にする上でも欠くべからざるものである．また，日本歯科医史学会，日本薬史学会，洋学史学会，日本獣医史学会，日本看護歴史学会の五史学会の仲間にも恵まれ，毎年一度，合同例会を開催している．皆さまとともに本学会が今後も益々発展することを願ってやまない．